

分 担 研 究 概 要

帝京大学医学部

田 中 美 郷

「聴覚障害を有する重複障害児並びに重度脳障害児の聴力障害の診断と訓練に関する研究」。これを設定した理由は、今日幼児難聴の診断学やリハビリテーションは方法論的に一応確立し、実践的にもみるべき成果を上げつつあるのに対し、重度障害児における聴覚障害の問題はほとんど顧みられていないからである。この問題を打開するためにわれわれは①重度障害児における聴覚障害の実態を知る、②聴覚障害の診断上の問題点と対策を明らかにする、③補聴器の装用法とその効果を明らかにするの3点に焦点を当てて研究を進めてきた。

まず①の問題については、三好らは宮城県整肢拓桃園の幼児20名、小学生81名、中学生28名、母子入園児6名について、耳鏡検査、インピーダンスオージオメトリー、純音聴力検査などを行って、過半数の子供に耳垢栓塞、幼児の30%、小学生の9.9%、中学生の7.1%、母子入園児の66.7%に滲出性中耳炎を認めた。中耳炎による聴力障害は治療により治し得るが、肢体不自由児では肢体不自由に集中的に眼が奪われて中耳炎が見過されているようである。一方鷲尾らはダウン症児（幼児中心）延べ55名に各種聴力検査を施行し、聴力損失20 dB以上のものを聴力障害とみなすと、両耳に聴力損失のあるもの約30%、1側性障害も含めると半数にも及ぶことを見出した。これらの聴力障害の原因は明らかにしてないが、高度難聴がなかったことや、滲出性中耳炎の治療によって聴力障害が改善した例が若干ある点からすると、三好の場合と同様に中耳疾患ないし伝音難聴が気づかれずに

いる可能性が否定できない。滝口らは広島県立身体障害者リハビリテーションセンターおよび肢体不自由児施設若草園で扱った言語障害児（前者208名、後者91名）を精査したところセンター症例208名中難聴の確認できたもの10名、このうち難聴のみ5名、重複障害5名、若草園91名について難聴は2例であった。

ところで重複障害児における難聴診断は難問が多く、特に行動反応を指標にした聴力検査では難聴診断の困難な場合が多い。このような子供に対して脳幹反応聴力検査（ABR）が汎用されるようになった。山田らは北九州市立総合療育センターで扱った障害幼児172名中ABRのみで検査せざるを得なかった例は57例あったという。ABRの信頼性に関しては、ピープショウテスト（PST）のできた35例についてみると両者の検査成績はよく対応していたという。鷲尾もダウン症児でPSTとABRの両方を行った13例では、両者間に15 dB以上の差のあるものはなかった。このようにABRは重度障害児の聴力測定手段としては有力なものであるが、しかし問題も多い。特に脳障害児で脳障害ないし脳損傷が脳幹にまで及んでいる例では、聴性行動反応による評価よりもABRの成績の方が悪い場合が少なくない（三好ら、加我ら、田中）。加我らはABRのIないしI+II波しか出なかった貴重な例を7例を報告した。なお、難聴は後天的に生ずる場合もあるが、これは重度障害児においてもあり得ることを田中が示した。

補聴器装用指導およびその効果については田中が検討したが、これによると重度脳障害

児といえども、残存聴力が存する限り補聴器は役立つ。ただし、補聴器が有効に使えるためには聴力障害の程度の確認と忍耐強い装用指導が不可欠であることを強調した。

今回の研究で得た結論は

- (1) 重度障害幼児の聴力障害については、伝音難聴の原因ともいふべき滲出性中耳炎に罹患している例が少なくようであるが、しかし気づかれることもなく放置されてある可能性が大きい。
- (2) 重度障害児の聴力検査には今日なお決定的な方法がなく、確定診断にはあらゆる聴力検査法を駆使した長期にわたるフォローアップが必要である。
- (3) 聴力障害のあるものについては、重度障害児といえども補聴器を有効に活用させ得る。言語獲得には到らなくても、前言語的レベルでの親子間のコミュニケーションに多少なりとも役立つならば、親子間の情緒的安定が得られ、これが療育上好ましい効果をもたらすことは想像に難くない。それ故に難聴の程度の確認、補聴器装用指導は、たとえ長期間を要しても忍耐強く続けてゆくべきである。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



「聴覚障害を有する重複障害児並びに重度脳障害児の聴力障害の診断と訓練に関する研究」。これを設定した理由は、今日幼児難聴の診断学やリハビリテーションは方法論的に一応確立し、実践的にもみるべき成果を上げつつあるのに対し、重度障害児における聴覚障害の問題はほとんど顧みられていないからである。この問題を打開するためにわれわれは
重度障害児における聴覚障害の実態を知る、聴覚障害の診断上の問題点と対策を明らかにする、補聴器の装用法とその効果を明らかにするの3点に焦点を当てて研究を進めてきた。